はすだっこ人権通信

11月号

この「はすだっこ人権通信」は、毎月何人かの教員が、人権・同和教育に関する情報や、個人の思い・つぶやきなどを発信します。読んだ方の人権意識の高まりや、新たな発見があればと思います。ぜひ、ご家庭でお子さんと一緒にご覧いただき話題にしてみてください。また、ご意見・ご感想等があれば右記フォームまでお寄せいただけると喜びます！

人権・同和教育担当　塚田 哲也

「助けを求めることができる環境に」

皆さんは困ったときに「助けて」と言うことができますか？何か、困ったことやつらいことがあったときに、助けを求められず我慢してしまう人もいるのではないでしょうか。「助けて」と言うことは、自分を大切にする行動だと思います。そして、そんな助けを求めている人を受け止め、手を差し伸べる人がいてくれる社会こそが、人権が尊重されている社会なのではないかと思います。

そのような環境を作っていくために、まずは他愛のない話でもしっかりと耳を傾け、誰もが安心して話をすることができるようにすることだと思います。そうすることで、何かあったときに助けを求めることができるのではないでしょうか。日々、子どもたちと過ごす中で、「あの時の話の聞き方良くなかったな」「あの時もっとこういう声掛けをしたら、子どもたちはもっと安心しただろうな」と反省することが多いです。子どもたちはいつも「お助けする！」と色々な場面で助けてくれます。そんな子どもたちが「困った」「助けて」を口にすることができるよう、日頃の会話を大切にしていきたいと思います。

大塚　帆乃

「現代という時代は？」

私は日本の歴史が好きなのですが、その中で「転換点はいつ？」と問われれば、「明治維新」を答えの一つにあげます。明治時代になると、人々の間に西洋の考え方が紹介されるようになり、西洋の制度や技術、文化が短い間に浸透していきました。この背景には、寺子屋の役割が大きかったと考えます。江戸時代には、武士の子ども達が通う藩校や私塾に加えて、町や村の子ども達の基本的な読み書き計算といった教育を支える場が寺子屋でした。寺子屋での学習による教育水準の高さが、明治時代の大きな変化に対応し、日本の近代化を推し進めていく力となったのでしょう。

さて、現在はというと、日本をはじめ世界の変化がとても激しく、将来の見通しが難しく不安定な時代となっています。この状況を乗り切っていくためには、明治のころにくらべて教育の重要性がさらに高まってきていると思います。一人一人の子どもが、自分の求める学びをどんどんどんどん深めることができる環境が重要なのではないでしょうか。未来を担う子ども達が経済状況、職業や地域などによって格差が生じず、教育水準を高めていくことが必要であると思います。

おわりに、好きこそものの上手なれで、未来を切り開いてほしいと思います。

原　満夫

「ランドセルの色」

平田小学校の場合、子どもたちの通学かばんは、幸か不幸か多くが黄色のランバックです。他の地域の方から見ると、そろいの黄色のランバックの子どもたちの登校する様子は珍しいものかもしれません。たしかニュースでも取り上げられていたこともあるような。

ランドセルというと、今や、ピンクに水色、茶色とそれぞれの個性や好みに合わせて選ぶことができます。一昔前は、というと男の子は黒の、女の子は赤のランドセルが定番でした。そのことについて何も気にも留めていませんでした。それが当たり前に感じていました。この当たり前って、決めつけですよね。

男の子はロボットや車が好きで、女の子はままごとや人形遊びが好きとか、これも決めつけられたイメージです。今まで気づかいないうちに見過ごしてきた、疑問にも思ってなかったことが、まだまだあるなと思っています。伝統とか慣習の中で無意識のうちにつくられているのかもしれません。あれ？これって？と思ったら考えてみたいなと思っています。

高木光代